

ムを指している。近代西欧医学にないものとして指弾される脾臓については、形体や位置・主機能から脾臓に比定されるにしても、システムとしては十二指腸や胃機能、さまざまな内分泌機能を含めて考えねばならない。

そこで、五蔵の中から、「肝」を取り上げ、現代の「肝臓」とどのようなかわりがあるのかを病証を材料に検討してみた。中国伝統医学でいう「肝」のシステムは「肝」を中心にして「胆・目・足厥陰肝経・筋・怒」など関連しているが、「肝」というシステムの中心にある「肝」という蔵は「肝臓」とどのような関係にあるのだろうか。

肝炎や肝硬変などの「肝臓」の病証と比較した「肝」病証は次のような記述である。

①『靈枢』経脈篇の足厥陰肝経の経脈病証

②足厥陰肝経の経穴の主治症

③その他『内経』に散在している「肝」病証  
たとえば①の病証を見てみると、

是動病—腰痛不可以俛仰・丈夫瘡疝・婦人少腹腫・甚則噎乾・面塵脱色

所生病—胸滿・嘔逆・飧泄・狐疝・遺溺・閉癃

と記述されているが、この中で明らかに「肝臓」病証と思われるものは「胸滿・嘔逆・飧泄」であるが、逆にいえば「肝臓」病証の「倦怠感・発熱・頭痛」などが記載されていないのが知れる。

このように②や③をみてみるとつぎのようなことがいえる。

中国伝統医学でいう「肝」は、「肝臓」とある程度かわりがあるが、まったく別のものを想定していたといえる。このことは心包・三焦が「無形」であることも関わっている。今回取り上げなかったが、中国伝統医学の「胃」は「胃 Stomach」に相当しないなどを含めても、中国伝統医学の蔵府観は、現代医学の臓腑観から切り離す必要がある。

【注】

(一)(二)両者を区別するために、中国伝統医学の蔵府には「蔵」をつけず、現代医学の臓腑の場合「臓」をつけた。

(三)林克「五臓の五行配当について—五行説研究 その一」『中国思想史研究』第六号、二七頁、一九八四。

(四)石田秀実『中国医学思想史』一三四頁、東京大学出版会、東京、一九九二。

(平成五年四月例会)

森鷗外と医学留学生たち

山崎 光夫

森鷗外(一八六二—一九二二)は明治十七年(一八八四)、念願の洋行を実現する。陸軍二等軍医の地位で陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究のためドイツ留学を命じられた。

日本がドイツ医学に範を取るようになった経緯には、明治二年一月二十三日、行政官より医学校取調の事を命ぜられた

岩佐純、相良知安の建議が重要視された。日本の近代医学の主流を占めていた和蘭の医書の多くがドイツ医書の翻訳であるという事実が説得力があった。また、当時、普仏戦争（一八七〇〜七二）で勝利をおさめたロシアは、富国強兵、文明開化をめざす明治新政府の格好の手下ともなっていた。明治二年五月、医学教育に、ドイツ医学を採用し、ロシアの教師二人を招聘するの廟議が決められた。

鷗外は明治十七年八月二十四日、仏船メンザレエ号で横浜を出港。同乗の医家に、片山國嘉、隈川宗雄、萩原三圭、長興稱吉などがいた。十月十一日、ベルリンに到着した。

当時、ドイツには日本の近代化を支える政治、法律、軍事、教育、医学など多方面のエリートたちが滞在していた。鷗外もその一人である。

写真に医学留学生たちが、石黒忠應陸軍省医務局長を中心に一堂に会した有名なショットである。石黒は明治二十年（一八八七）九月、ドイツのバーデン国都カルルスルーエで開催される第四回赤十字国際会議に政府委員として出席するため、七月にベルリンに到着していた。

写真に撮っているのは、森林太郎（鷗外）、石黒忠應のほか、河本重次郎（のちの主な経歴、以下同・東大初代眼科教授）、武島務（ドレスデンにて客死）、山根正次（日本医学校初代校長）、中濱東一郎（日本保険医学協会会長）、佐方潜造（不明。鷗外日記に「駐英公使の族人なり」とある）、濱田玄達（日本産科学のパイオニア）、田口和美（日本解剖学会会頭）、島田武次（宮城病院

婦人科産科長）、加藤照齋（昭和天皇侍医）、片山國嘉（日本法医学のパイオニア）、谷口謙（不明。明治二十二年十一月六日帰国）、北川乙次郎（和歌山県立病院長）、瀬川昌耆（東京小児科病院設立）、北里柴三郎（破傷風菌の純粋培養、ジフテリアの血清治療、ペスト菌発見）、隈川宗雄（日本医化学のパイオニア）、江口のぼる（大阪城南病院長）、尾澤圭一（明治二十二年五月二十一日上海にて客死）。



江口 襄 尾澤圭一  
北里柴三郎 隈川宗雄  
瀬川昌耆  
北川乙次郎  
石黒忠應  
谷口 謙  
加藤照齋 片山國嘉  
島田武次  
濱田玄達 田口和美  
佐方潜造  
中濱東一郎  
山根正次  
武島 務  
河本重次郎  
森林太郎  
（外左記念  
本郷図書館蔵）

のちに日本の医学界を背負ってたった錚々たるメンバーである。

明治二十一年（一八八八）七月五日、鷗外はベルリンを離れ帰国の途についている。

#### 参考文献

- (一) 森林太郎『鷗外全集』岩波書店、昭和五十年
- (二) 山崎一類『二生を行く人』新典社、一九九一年
- (三) 富士川游『醫史叢談』昭和十七年。

（平成五年六月例会）

## ◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

福島義一著

### 『聞き書き・医者のみた阿波史・新阿波医人伝』

著者は、昭和十年大阪大学医学部を卒業後、眼科学を専攻するがたわら、医史学的研究をされた。

研究方法の特徴は、常に現地を訪ねて資料を収集することである。この精力的研究方法を、昭和十九年四月に眼科学教授として赴任以来実行されている。

現在までに発表した著書、論文は極めて多いが、『日本眼科史』（昭和二十九年）、『阿波医学史』（昭和四十五年）、『徳島県医師会史』（昭和五十一年）、『阿波の蘭学者』（昭和五十七年）、

『徳島大学医学部史』第一卷（昭和六十一年）、『眼科学史の窓』（昭和六十二年）…等、がある。

そして、平成四年十一月、郷土医学史の研究に貢献した功労者として、日本医師会最高優功賞を授与された。

私は、長年月にわたる著者の不断の研究により、幕藩時代・明治・大正・現在に至るまでの多くの貴重な資料、人物等が埋もれることなく、医史学的に解明された、と思つてゐる。

現在、著者は徳島市医師会史の編纂委員長として尽力されているが、収集した多くの資料のうち、医師会史には掲載されないが、捨てるには惜しい資料を収集したのが、本書である。

本書は、三編即ち、一、史編 聞き書き 医者のみた阿波史 二、探編 徳島市内の医史跡探訪記 三、譚編 史譚 筆のたわむれ に大別されているが、各編にわかり易い文体で記載されている逸話は、三十五以上にのぼつてゐる。

それらの逸話のうちのいくつかを紹介したい。

阿波藩政時代の博物学（本草学を含む）の奇書（名著）として知られている『阿波産志』五十七巻、『淡州出品筆録』二巻、『阿波産志目録』一巻が、現在東京国立博物館に所蔵されていることを発見し、この編集に携わつた方々とその内容に就いて調べられた。これは、徳島県にとつて極めて重要な文化財を、百余年振りに見出したことになった。

難産で苦しむ主婦に、提灯の柄についている鉄鉤を利用して、胎児の身体を載断し娩出した結果、無事母体を救ふこと